

「自閉症・発達障害児者の生活を 考える研修会」

平成22年2月13日（土）10:00 ～ 15:30

〈県民文化ホール未来会館 ハイビジョンホール〉

主催 : 障害者支援施設 伊自良苑

「自閉症・発達障害児者の生活を考える研修会」

専門の先生の講演と障害者支援施設伊自良苑での取り組みを紹介し、自閉症の人達がこの社会で生活をしていく為には何が必要なのか、私達はどうか支援したらいいのか、そのあり方を考える研修会を下記のように開催いたします。皆様にぜひ参加いただきますよう御案内申し上げます。

《研修テーマ》 『自閉症・発達障害児者の生活を考える』
～自閉症・発達障害児者が必要とする支援とは～

《日 時》 平成22年 2月 13日（土）10:00 ～ 15:30

《会 場》 県民文化ホール未来会館 ハイビジョンホール
岐阜市学園町 3-42 TEL(058)296-0888

《講 師》 大正大学人間学部教授 児童精神科医 小林 隆児 先生
全国自閉症者施設協議会理事 あかりの家施設長 三原 憲二 先生

《プログラム》 9:30～ 受付開始

10:00 開 会

10:10～ 伊自良苑の紹介 伊自良苑施設長 平下 博文

11:00～ 講 演 ①「自閉症者支援の実際」
全国自閉症者施設協議会理事 あかりの家施設長 三原 憲二 先生

～ 質 疑

12:30～ 休 憩

13:30～ 講 演 ②「自閉症の理解と行動障害への支援」
大正大学人間学部教授 児童精神科医 小林 隆児 先生

～ 質 疑

15:30 閉 会

《参 加 費》 無 料（どなたでも参加できます）

《定 員》 200 名（先着順。定員になり次第受付終了いたします。）

《主 催》 社会福祉法人同朋会 障害者支援施設 伊自良苑
（岐阜県「発達障がい者生活・就労支援事業」委託事業所）

《申し込みについて》
申し込み用紙記入の上、郵送または FAX にて伊自良苑までお申し込みください。
定員を超えた場合は、ご連絡いたします。

《申し込み・問い合わせ先》
障害者支援施設 伊自良苑 〒501-2122 山県市藤倉 84
TEL (0581)36-2175 FAX (0581)36-2530

講 演

『自閉症・発達障害児者の生活を考える』

—自閉症成人施設の役割—

伊自良苑では

障害者支援施設 伊自良苑

施設長 平下 博文

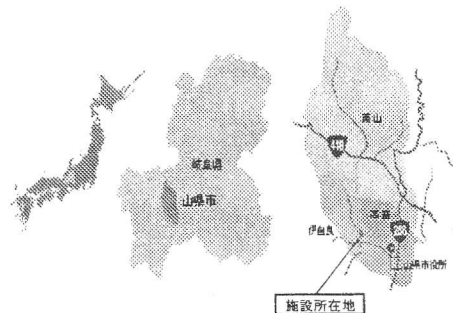
『自閉症・発達障害児者の生活を考える』

—自閉症成人施設の役割—

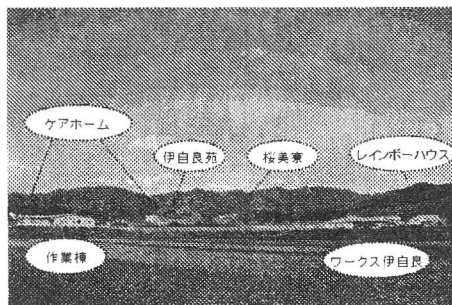
伊自良苑では

障害者支援施設 伊自良苑
施設長 平下 博文

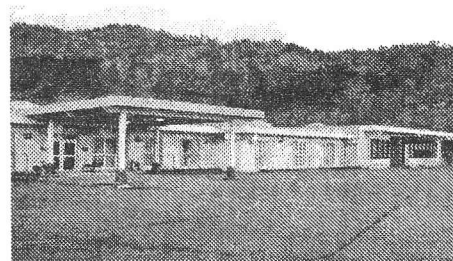
施設の所在地 岐阜県山県市
設置主体 社会福祉法人同朋会



同朋会伊自良地域障害福祉事業所



障害者支援施設 伊自良苑 (自閉症成人施設)



「ひと」として生きていることを
共に共感しつつ...



<沿革> 設置母体 社会福祉法人 同朋会

- 昭和62年 7月 知的障害者更生施設伊自良苑 開設
- 平成 4年 4月 しゃくなげ寮(自閉症者棟)増築開設
(定員80名へ変更)
- 12年 4月 自閉症者専門施設へ移行
(入所定員60名へ変更)
- 12年10月 強度行動障害特別処遇事業認可
- 14年 4月 改修増築に伴い、入所定員 70名に変更
- 16年 4月 通所授産施設『ワークス伊自良』開設
- 17年 4月 グループホーム『ウイング伊自良』開設
- 19年 4月 法により、障害者支援施設伊自良苑に移行
(施設入所支援 70名)
(生活介護支援 80名)

<職員数> 支援員34名

利用者の状況

① 利用者の年齢層・男女比

22. 1. 15現在 施設入所70名 日中生活介護81名

年齢	16～19	20～29	30～39	40～49	50～59	計
男性	4	28	27	8	1	68
女性	1	3	8	1	0	13
計	5	31	35	9	1	81

伊自良苑では、施設利用者一人ひとりの自閉症症状や生活能力等により、各々のニーズに応えられるよう、生活ユニット体制で支援を行っている。

	生活ユニット	対象者	現員
東館	せせらぎ	日常生活全般に付添い支援を必要とし行動障害に陥りやすい利用者	13
	ひだまり	日常生活全般に付添い支援を必要とする利用者	17
西館	さえずり	女性利用者	11
	はばたき・かがやき	日常生活全般に自立度の高い利用者	15
	生活ホーム	ケアホームを目指す自活訓練対象者	4
ケアホーム (ウイング伊自良)		地域支援を受けながら「自立生活」が可能な利用者	4

作業プログラムとして5つの作業グループで日中活動支援を行っている。

〈 自主製品作業 〉

- ・生活班 ビーズ製品作り
- ・農芸芸班 野菜作り・陶芸・竹炭製品等

〈 受注作業 〉

- ・大森作業棟 ハンガーの組み立て・スライドケース組立
- ・下請け班 配管のジョイント部品の組み立て

〈 苑外作業 〉

- ・苑外実習班 「ワークス伊自良」にて作業

施設(ユニット)の生活プログラム(一日)

6:30	起床	12:00	昼食
7:30	朝食	13:00	作業開始
9:30	朝礼	15:00	作業終了
10:00	作業出発	15:30	帰館(片付け諸準備)
		16:00	入浴
		17:30	夕食
		19:30	片付け、余暇活動
		22:00	消灯

施設(ユニット)の生活プログラム(週間)

	午前	午後
月	作業	作業
火	作業	作業
水	作業	作業
木	作業	作業
金	作業	作業
土	ユニット・個別のプログラム	ユニット・個別のプログラム
日	余暇のプログラム	余暇のプログラム

自閉症の基本障害

- ① 顔の表情などで相手の気持ちが分かるなど、非言語性行動における、対人的相互作用の質的な障害がある。
 - ② 話し言葉の獲得の遅れや偏り、言葉遣いの奇妙さなど、意思伝達の質的な問題がある。
 - ③ 強いこだわりや固執行動・常同行動がある。
- ーアメリカ精神医学会「精神疾患の分類と診断の手引第4版」ー
- その他、同時失認 (一つの場面が何を意味しているか分からない)
- 相貌認知の障害 (顔が分からない)
- 表出障害 (言葉や身振りで表せない)
- 他動や感覚過敏、睡眠障害、知的障害を伴う場合がある。



人社会で生きていくうえでの障害の大変さ

成人自閉症施設の役割 伊自良苑では

- 基本的障害の上に、各人の育ち、暮らしによって施設利用時（成人期）の姿がある。
- これを認めた上で施設という場所を拠点とした新しい生活を作っていくことになる。その人なりのライフステージ、将来のあるべき姿を想像して今の暮らしを作っていく。
- その基本は現代社会の「普通」の暮らしであり、一日、一週間、一年を通じて、特別に用意されたものでない「普通」感覚の生活。
- 成人期の生活の基本は「働く」こと。生産活動に関わることは自己を実現させることと同時に他のために働くこと。（現在社会の一構成員として）

成人自閉症施設の役割 伊自良苑では

- 施設は寮（多人数の住まい）（家庭に代るもの）としてあり、ウィークデ이의屋間は住まいから働きに出かけるのが、成人の生活の基本。
- 生活を作っていく中で個々人の課題を解決していくことや、課題に取り組むことによって、生活そのものが整っていく。
- 同時にその過程で課題を克服することや、体得（得とく）、学習することが、達成感、自信、安心となり情態が安定していく。
- 全ては、現在社会で生きていくその人の「生活」づくりから始まります。
- そのことが基本障害の上に、何重にも積み重なって生じてしまった「行動障害」の出現を軽減させていくことになる。

成人自閉症施設の役割 伊自良苑では

- 人との関係の修復は、人社会で生きていくうえで欠かせないもの。人を介して生活ができていく心地良さは、異常なこだわりや、あるものに固執し耽っているより、断然心地良いはず。
- この過程は、支援者側からすれば、療育的対応であり、自閉症者本人にとっては、自己コントロールする過程である。
- 自閉症を治そうとしているのではない。自閉症の特性は直すべきものではない。
- 人として生きていくには、その根幹部に大変な障害（情報処理や意味理解の部分）を有しているのです。
- 私達はその大変さを認めた上で、誰もが通っていく人生を支援するものとして、共に喜怒哀楽を体験し、共に歩んでいく過程こそが療育と考えています。

成人自閉症施設の役割 伊自良苑では

障害を理解しようとする人（生きることを支援する人）がいて、生活する場所があって、生活する営みがある。それが施設です。
その意味では、施設は特別な場所ではありません。

基本的な障害がゆえに社会での生きにくさがある自閉症の人達と、支援するものが一緒になって、この大変な障害と向き合い、生き方を共に学び、身に付けていく場所です。

「施設を拠点として」とはそういうことです。

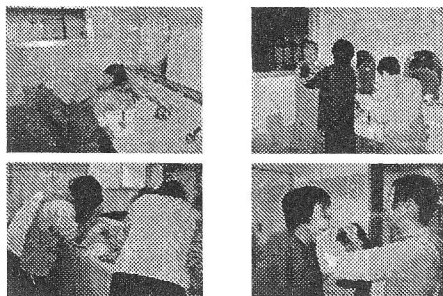
地域の中に、こうした「拠点」が増えることが、この人達と共に生きる『共生社会』を実現していくことになります。

伊自良苑の生活

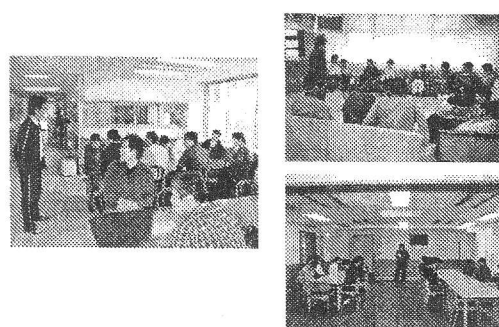
起床



洗面



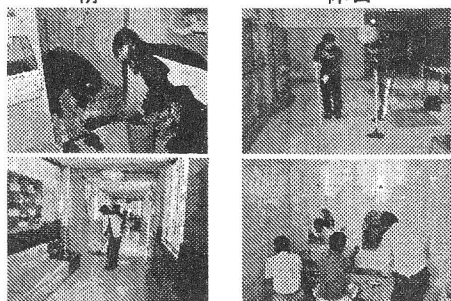
朝礼:一日の予定の確認



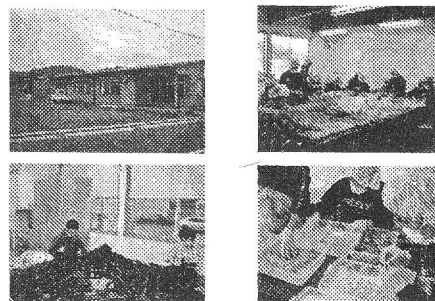
清掃

朝

休日



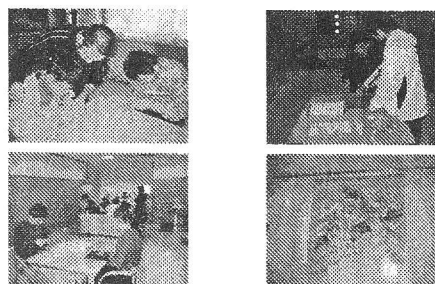
作業:大森作業棟



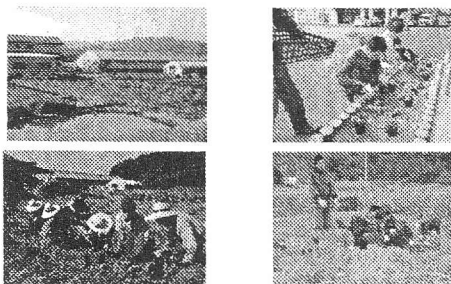
下請け班:電気の配線コネクター



生活班:ビーズ製品の製作



農工芸班：農作物、苑庭の管理



衣類の片付け・入浴準備



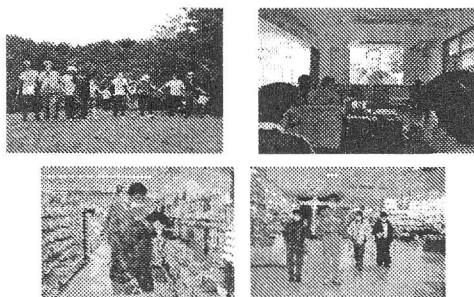
夕食：配膳・食器洗い



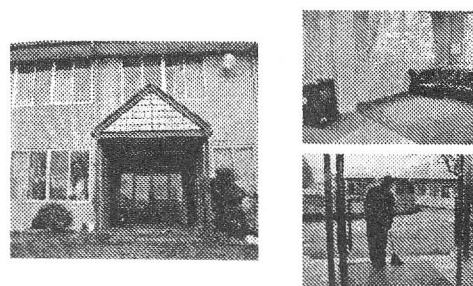
夕食後の生活



土・日の暮らし



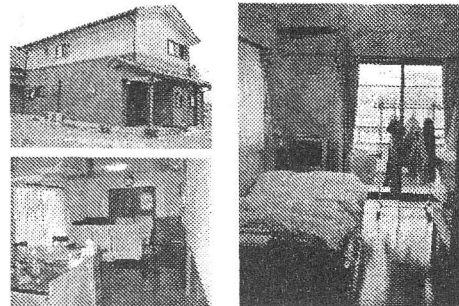
生活ホーム：自活訓練4名



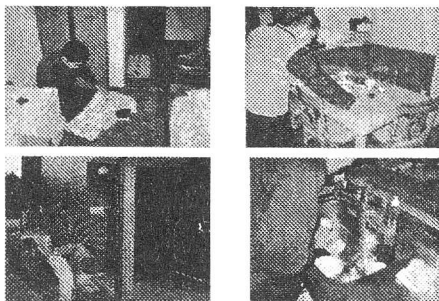
掃除、洗濯など自活訓練棟にて



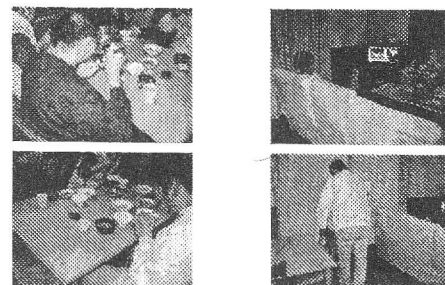
ケアホーム：入居者4名



ケアホームの生活

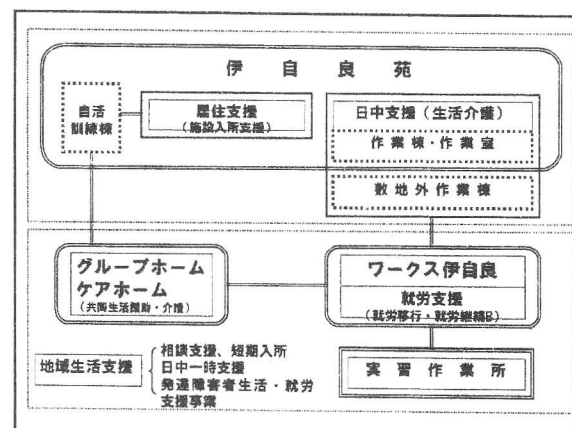


ケアホームの生活



伊自良苑
自閉症・発達障害者支援

体制図



自閉症者施設(入所施設)の役割

1. 生活を保障する機能
地域での支援が限界な人達の生活を保障する役割
2. 24時間生活支援(施設療育)機能
ライフステージに応じた24時間の生活支援
将来を想像した、目標を明確化した支援
3. 地域生活支援の拠点としての役割
地域での暮らし方をバックアップしていく
ホームヘルプ・ショートステイ・就労等 生涯に亘る支援
4. 自閉症療育を担う人材の育成
24時間生活支援を通じた援助技術⇒専門性の育成

伊自良苑施設の基本理念

「人」として
生きていることを
ともに共感しつつ



自閉症の人達への支援理念

この理念の実現こそが私たちの役割であり、自閉症施設の存在意義そのものであると思います。

※参考資料

「岐阜県発達障がい者生活・就労支援事業」の報告

社会福祉法人 同朋会

伊自良苑地域生活支援センター

～はじめに～

当事業は、18年4月から県より委託を受けて、主に成人期の自閉症・発達障害者の生活や就労等に関する支援等を実施してきた。平成17年4月に発達障害者支援法が施行後、各都道府県や政令指定都市で発達障害者支援センターの設置が進められ、岐阜県では、18年1月に岐阜市内の希望が丘学園内に「発達支援センターのぞみ」を設置。当機関とは、相談対象者の年齢や主訴等によって、役割を分担しながらも、連携を図りながら進めてきた。

事業受託以降、相談員1名、嘱託の臨床心理士（非常勤）1名で担当してきている。相談件数は、発達支援センターのぞみに比べれば一桁違うものの、昨年度の総件数を10月の時点で超え、1月末時点で昨年度比で1.15倍の総件数に至っている。のぞみのように周知されていないことは課題ではあるが、徐々に周知の広がりを感じられる。

1. 利用される方々の状況

当事業を利用される相談者の方の特徴として、特別支援学校や特別支援学級を在籍した経験のある方（現在在籍している方も含む）よりもむしろ、普通学級に在籍していた方が8割以上を占め、高校、専門学校、大学まで進学、卒業されている。そのため、今までの人生の中で、全く福祉とは、無縁であった方々も少なくはない。

今年度の相談対象者に関して年齢内訳〔表1〕や圏域別住所内訳〔表2〕は以下の通りである。県全域を対象とした事業であるが、当事業所は、岐阜圏域に所在することから地元圏域の相談者数は約半数を占めている。他圏域の相談者が遠方から当事業所までお越しになられる方もあるが、可児市や多治見市では、市役所等で月1回の相談会を設けていただき、更には近郊の市町の方の相談場所としても活用させてもらっている。また、瑞穂市からも市所有の建物を相談場所として提供していただき、西濃方面の方の相談拠点として利用している。

〔表1〕

年齢(才)	～10	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～	不明	計
男性	4	17	31	18	9	5	0	1	85
女性	1	3	10	11	2	0	1	1	29
計	5	20	41	29	11	5	1	2	114

〔表2〕

圏域等	岐阜	西濃	中濃	東濃	飛騨	県外	不明	合計
対象者数	54	5	22	25	1	4	3	114

相談者は、対象者である本人以外では、家族、親戚、近隣住民等本人と身近な関係の方々や行政機関や病院、障害福祉サービス支援機関、相談支援機関、学校、職業安定所、勤め先等の関係諸機関からの相談もあった。

2. 支援の実際から

相談者は、様々な思いを持って当機関を利用される。それらが時には、潜在的なものでなかなか見えてこなかったりする場合や当機関に問題解決を全て委ねられる場合等もあるが、まず何を望んでいるのかしっかりと掴むことは難しいところではあるが重要である。そうした中で、本人以外の周囲が望んでいることと本人との思いが異なっているケースは少なくはない。

当機関の基本的な役割としては、相談対象者や周囲の方々がいかに共通理解をもって問題解決に取り組むのかを検討していくところである。

事業を開始してから、「発達障害があるのではないか？」との相談は、相談総件数の増加と同じくして増加している内容であるが、たいへん慎重に話を進めていかなければならない。障害施策とは無縁の世界で生きてきた方々にとって、障害の有無について向き合ってもらうことは、たいへんデリケートで難しい問題である。そのため、支援を求められたとしても、例えば勤務先に支援者が立ち入ることがどういうことなのか等を相談者に考えてもらう必要がある。

問題解決のためには、当機関のみでは出来ないことが多く、様々な諸機関と連携を図って行く必要がある。また、本人を支えてもらう身近な方々の協力も欠かせないケースもあり、本人を取り巻く様々な場面において、沢山の方々が本人を支えるネットワーク作りを目指している。特に、広域の事業であるためにできるだけ地元基盤で支援体制が構築されるように進めている。

しかしながら、障害施策や福祉サービスを利用しにくい相談対象者の諸条件に加えて、利用できる施策やサービスは少ない現状である。また、自閉症・発達障害の障害特性が周囲に理解されにくく、また誤解されがちであるが故に、周囲との関係を築いていくことに困難な障害特性を持つ方々が、これまでの経験上から、人や社会に対して不信感や疎外感等の様々な感情を抱いたり、体感反応を示している。社会の中でたいへん生きにくさをもっているが、周囲からは、当事者のことを理解しにくく、対応が分からない等々関わりにくさについての声をよく聞く。双方がいかに共存していけるのかを検討していくためには整理していかなければならないことは沢山あり、たいへん時間の要するところである。

このような状況の中で支援を提供していく際には、支援者側として、方策や手立て等提案する折に、いくつかの選択肢を用意してできる限り本人に選んでもらうことに心がけている。これからの取り組みに対して、自身が選んだこととして本人に責任を持って取り組んでももらいたい思いもあるが、大人として社会の中で生きていくためには、障害があるとしても大人としての責任が求められている現状があるためでもある。

より多くの理解者を増やしていくことは、当事業の担っている役割でもあるため、様々な機会や場所で理解促進のための活動を行っているが、当機関内でもその役割が少しでも担えないかと試行的な取り組みも始めた。なかなか就労の面において、発達障害の方々は、勤め先で障害特性の理解が難しく、施策としてもまだ整っていない現状の中である。そのため、当法人内の施設機能を利用して、職員や従業員としても立場での就業体験を試行的に実施し始めた。まだまだ整備が必要ではあるが、社会の中で不足しているニーズをいかに開拓していくのかも課題のひとつでもある。

現在の発達障害をめぐる施策等において、自閉症と発達障害が別のものとして取り組みがなされている現状が存在する。施設支援における重度の自閉症者の支援を経験し、また当事業を通じて地域の自閉症・発達障害の支援を行っているが、本人や周囲において生じている問題の根本は、決して別物ではなく、取り分けて考えてはいけないことも、当事者たちの声や当事業を通して分かってきた。この度の研修においては、たいへん簡略した内容での紹介とさせていただくが、これらの検証をまた別の機会に提案したいと考えている。

講 演

『自閉症支援の実際』

全国自閉症者施設協議会理事
あかりの家施設長
三原 憲二 氏

自閉症支援の実際

障害者支援施設・自閉症成人施設 あかりの家 三原 憲二

<橋渡し役>

「モノ・トラックの世界とマルチ・トラックの世界の<橋渡し>するためには、関わる者が、モノ・トラックの世界を尊重し、出来るだけ想像力を駆使しなければならない。」

(『自閉症だったわたしへ』の著者;ドナ ウィリアムズ(オーストラリア)の日本の講演で)

もし①自分の周囲で起きていることの意味が理解できず、②自分が周囲の人たちに伝えたいと思うことの伝え方がわからず、更に③その状況がどのように推移していくのかという見通しを立てることもできず、その上④その困難な状況を脱却するための想像力も失っているとしたら、あなた方は一体どのような反応や行動を示すことになると思いますか
(英 パトリシア・ハウリン)

<準備体操>

1 施設で、いつもの風呂が工事で使えなくなりました。そこで隣の居住棟の風呂場を借りることになり、いつもの風呂場の前を通り過ぎようとした時のことです、自閉症のK君が突然自傷を始めました。

(1) (支援者なら、反射的にまず思い浮かべなければならない)自傷の原因は何でしょうか？

(2) (支援員があなただったら)原因を思い浮かべた瞬間どんな言葉が出ますか？(例「コラッ!」)

2 駅の切符自動販売機の前で、困った顔で立っている人います。声をかけてあげたいのですが。

(1)困っている人が「田舎のおじいさん」の場合、普通、どんな声がけをしますか？

(2)困っている人が「自閉症の人」の場合は、どんな声がけが望ましいでしょうか？

自閉症<理解>と<応援> 議論前に

<理解> (1)どう想像力を膨らませどう理解するか (2)この人権論議にどう応えるか

(1)「園長先生へ ぼくはマラソン大会でよくがんばりました 必ずごほうびをお願いして、プレゼントをさしあげますので、よろしくお願いします。」(09.12.7 A君からの手紙)

(2)「三原さん、東京では、作業を嫌がる自閉症の人に作業をさせようとすると、人権問題になるんです。」

<応援> 自閉症の人たちの可能性を見ないか

16年前、大半の人が重度の「あかりの家」に来た時、サンマが骨付きのまま出ているのを見て驚いた。

<理解>と<応援> その解釈で自閉症の人たちの具体的な困り度をイメージし、応援ができるか

「“ベースランニングが割合しっかりしてきた”とある小5の頃でも、『打ってから一塁へはしっかり走るがそれ以降の進塁はこわごわ走り、時にホームベースにつかないことがある』について、「ルールの理解が難しかったのだろう。」(18年前の三原のレポート)

A 自閉症の人たちの理解 ※以下 30 等は、あかりの家キーワード集番号

1 自閉症療育についての「共通理解」

- ①親の育て方などの「心因論」によって自閉症になるのではない。脳の中樞神経系の障害が想定。
- ②伸び伸びとか自主性に任すことより、わかりやすさ(構造化と組織化)が重要。
- ③一人ずつに丁寧に細かく付き合う。心の世界に入ってやりとりすることの大切さ。

④自閉症と知的障害は違う・・・知的障害を伴った自閉症児は、自閉症児として育てていく

2 自閉症という障害の理解・「障害特性」を知る

(1) 人間関係を作る力が弱い。うまくいかない。

- ・人と人の関係、雰囲気、状況、表情、言葉が、刺激として複雑あるいは早すぎてうまく統合できない
- ・人の心の状態が想定できない(「心の理論」サリーとアンの実験)
- ・これが乳児期から始まる。その最初の不快な相手が母親であるという、発達成長への影響。

(2) 認知の障害によって、外界からの様々な刺激をうまく統合できない。

- ・「モノトラック」(⇔「マルチトラック」)の世界。一つ一つの感覚から意味を見出すことができても、幾つかの感覚から同時に意味を見出すことは難しい。(ドナ・ウィリアムズ)
- ・わかりやすい環境作りの必要性、過剰な情報の整理・守る「構造化」

(3) 表出不安・困難

- ・自分の意志を表現するのが苦手
- ・情報(入力)過剰の時もストレスから表出不安がおこる

(4) 動作不自由

- ・不当緊張、反射的な行動、多動など したくないのにしてしまう したくてもできない

4 知っておきたい傾向

- ①言葉は偏った理解のことも多いが、表面的に観察される以上のことが解っている。³⁴
- ②変更への対応が苦手である。一旦頭に入れば強い
- ③繰り返しには強い。(スケジュール化し安定を導く、作業に導入)
- ④視覚的な刺激には比較的良好な反応が期待できる。(刺激の工夫、刺激のコントロール)
一方で、感覚的な刺激で耐え難いケースもあることを知っておく
- ⑤状況理解、抽象的な概念、ルール、冗談等を含め社会的な関係理解が苦手。具体的に教える。¹⁶

B 自閉症の人たちへの応援

0 支援の基礎は、＜食う・寝る・出す／出る＞

1 4つの応援

(1)関係作りによる応援

- ①いい関係は、いい二者関係。いい二者関係によって、安心と信頼関係を得る、あるいはまわりの世界を意味づけていく。不安に陥ってもその人を通して落ち着くことができる。ガラスを割らなくてすむ¹⁶¹
- ②わかりやすい関係と環境を作ることができるかどうか、それによって、プロとしての力量の半分が決まる。それによって、自閉症の人が生き易くなる。
無用な(対人的、環境的)刺激を整理したり最小限にして、不安や混乱から守ってあげる。そういったわかりやすい関係と環境では、こちらの気持ちも伝え易くなる。
- ③うまく表現できない人、うまく環境を理解できない人の不安・混乱・ストレスを)読み取る感性・感度
 - a)きちんと受け止める 安定感、安心感、信頼感
気持ちと体重を一步前に出す。逃げない、避けない、愚痴らない、暗くならない、応援をケチらない。
「ヨッシ、任せとけ!」「怒らなくても大丈夫。しっかり手を持ってあげるから」と応援の声をかけられるか。
安定感、ドッシリ感、逃げない。
 - b)ズレを修正してあげられる力量
- ④＜働きかけを受け入れる力・関係＞(学ぶ基礎)⇔ 拒否する、逃げる、無視する
Your pace(⇔ my pace)の力もつける、人との関係の中で生きるための基礎
＜働きかけをする力・関係＞(主導的な力、伝える力)⇔ 避ける、ごまかす、ひるむ
「作業するよ」、「頑張ろうや」、「ここ座って待って」「我慢しよう」「ゆっくり食べよう」「一緒に歩こう」と、必要に応じて、ポイントをもって「主導的」な声掛けができるか
- ⑤受容と主導のバランス。その中で、やりとり。優しさか厳しさか、といった二者択一が問題ではない。

どう受け止め、どう伝える関係が作れるかこそが大切。

- ⑥一貫性と確固とした姿勢。しっかり受け止める。(キツイは不可。多弁、お上手、不必要に刻々変わる表情、キンコンカンコン口うるさく注意するだけでは何もしない方がまだまし)
- ⑦伝えきる。きっちり場面を収める。十分ゆったりできたところで終わる。(中途半端な終わり方では、不快緊張や否定的な感情を溜め込むだけで関わらない方がまだまし)
- ⑧「できた」ところで終わる。(実際やらされたとしても)「自分でできた実感」を持たせたところで終わる。終わり(「できた」)をたくさん作る。
- ⑨先回りの支援。先手必勝。状態のいい時に成功しておく。
- ⑩その時々、状態に応じた支援の出し入れを惜しまない。
- ⑪失敗させない。成功させて信頼関係を作る。失敗を繰り返すと信頼関係が崩れる。初めての経験を成功で乗り越えることの大切さ(初物に弱い)。失敗すれば、場所や時間や方法や姿勢を変えて取り組み直す。 [62]
- ⑫正しい振る舞いは明快に承認、正しくない行為には「ダメ」より正しい振る舞いを具体的に教える。「頑張ろう」ではなく、どう頑張るかを具体的に提示する。

(2) 自己表現・アウトプットの弱さへの応援 [30]

表出不安、表現不足、行動の乖離

信頼できる二者関係、振舞い方を教えてくれる人、舌足らずを読み取ってくれる人
表現力や表現代替方法を育てる
ことばを育てる、引き出す

(3) 環境理解・刺激過敏・インプットの弱さへの応援

①<わかりやすい関係>

安心・信頼、具体的、一貫性、シンプル。(簡潔に指示や説明をしてくれる人)
理解のための手がかりを与えてくれる人(「あの人の話を聞きなさい」の指示)
マルチトラックをモノトラックに整理してくれる人・橋渡しをしてくれる人
⇔ わかりづらい関係では、混乱を引き起こし、どう振舞っていいかわからない [8]

②<わかりやすい環境>「構造化」(TEACCH プログラムから学べる)

物理的構造化(場所と活動の意味を一致、間仕切り、色彩などによる)、
スケジュール・日課表(見通し、始まりと終わりがわかる)
ワークシステム(どれだけの量を、どこから始めてどこで終わるのか、終わったら次何をするのか)
ルーティン(掃除や料理の手順書等)、
視覚的構造化・視覚支援(見ただけでわかる、絵や写真や文字、スケジュール表等で示す) [11]
環境等の変化理解の応援
環境理解の「手がかり」、てだて

③過敏な感覚刺激やストレスから守る [41] [43]

刺激からの遮断、視覚的構造化(ついたての利用、座る向きの変更、グルーピングの検討)

④マナー、約束事などの、抽象的なことへの応援

具体的に説明、振舞い方を教えておく

(4) 動作不自由への応援

①不当緊張や動作不自由さを助ける

「身体に働きかけて心に働きかける」(動作法、姫路親子体操教室)、身体と心の密接な関係
働きかけられる力(関係)と、働きかける力(関係)を育てる
力抜き 緊張部位への働きかけ、スピードを落としてあげる

②止めてあげる、しなくてもすむようにしてあげる

反射的な行動(先行刺激に支配される行動)を事前に止める
したくないのにしてしまう [5]、しなくてすむ型・待つ型を教えてあげる、ことばを介して動きを作る

こじれ、苦しみもがき、自己抑制できない環境や関係から離してあげる

2 自閉症の人達にも人が必要

—— 目が悪い人にはめがねが必要のように、自閉症の人には(めがね)人間が必要 ——

- (1)「おばあちゃんは、もうすぐ死にます。」 —理解しようとするしつこさと感度—
- (2)「手をもっといて、手をもっといて」と応援を求めてきた—したくないのにしてしまいそうになった時—
- (3)パニックになりかけた時「けんちゃん、耳ふさいで！」と友達が応援 —とっさの対応—
- (4)「メアリーが私を人間として受け入れてくれた」(ドナ・ウィリアムズ) —受け止め—

3 応援の感性、プロとしての感度 100

- (1)「しまった！」 伝えてなかった
- (2)「ゴメン！」 食器洗いを家でさせてないのだろう
- (3)「アッ、そうか！」 ご飯粒だったのか
- (4)「コレ違うぞ！」 優等生言葉は疑ってかかれ
- (5)「怠けるな！」 実は、怠けていたのは支援員であった

4 べからず集

- (1)多弁、お上手、口うるささ、キンキン声、不必要に刻々変わる表情
- (2)行動障害をこらしめの対象としてみる
- (3)後追い。終わってしまったの叱り(後手必敗)
- (4)わたしは〇〇療法(技法)だけ。
- (5)パニックもこだわりも拒否も、変な飲み方も、「自閉症の特性」「個性」「選択の尊重」

C 入所施設支援の力

1 入所施設の療育の基礎

入所施設の療育機能の基礎には、＜クウ・ネル・ダス／デル＞(食事・睡眠・排泄／日中活動という生理上・生活日課上の支援)がある。これらは相互に関連して、健康的な生活の基礎を作る。ところが、ここに蹟く自閉症の人たちは多い。これらをしっかり支援できるかどうか、自閉症者施設にとっては、療育の質を左右する基本的なテーマである。 127

2 入所施設の短期入所における療育的機能 ……短期入所による行動障害改善の背景

- ①わかりやすく構造化された日課や環境や関係の中で過ごす。(分かりやすさ、見通し)
- ②問題を引き起こしている環境や関係から離れる。(しなくてもすむ環境や関係)
- ③集団的日課の流れに乗せられる形での、健康的な生活の回復
- ④安定的な日中活動による食事・睡眠・排泄など基本的・生理的な生活力の回復
- ⑤疲れきった本人と支援者の、体力や気力の回復
- ⑥自閉症の理解と専門的な療育的支援 163

3 親との信頼関係、行政を巻き込む

丁寧さと、謙虚さと、専門性で、親や地域から信頼を得たい。親を孤立させない。 144 148

4 「知的障害の支援ができて自閉症の支援はできない。自閉症の支援ができれば知的障害の支援はできる」

5 自閉症支援は、＜療育＞のレベルで語ろう

＜介護＞のレベルで語る限り自閉症の人たちは敬遠される

あかりの家 自閉症療育のキーワード集(09年版) 抄

03. 2割/03. 11/04. 2/05. 2/06. 2/07. 2/08. 2/09. 2 改

5 したくないのにしてしまう苦しさ

(4)泣きながら母親にレタスを食べさせる

家に帰るとすさまじいばかりに食品の買い物にこだわるAくん。ある日、買ってきたレタスを、泣きながらお母さんに食べさせたという。どうしようもなく止められない苦しさを読み取れる。

8 母心

週末帰宅時に、母親に向かって、次の帰省確認が止まらなくなったOさん。母親は、まだ家に居たいのだらうと帰園の日を1日延ばす。それが増えていって、あかりの家でも、帰省にからんだいら立ちが目立ち始めた。

もう1日家に居させてやろうとする優しさが、Dさんを混乱させているようだ。更に、帰園が延びて、元々あった自宅での過ごし方の問題が大きくなった。そのあたりのことを母親とDさんに説明し、帰省は1泊2日で固定し、そのリズムは変えないよう頼んだ。

その固定が良かった。自宅での生活リズムができて、確認を減少させ、あかりの家にいても、帰省の見通しが立ちやすくなった。そして帰省に関するトラブルは激減した。

11 スピードメーター

職場まで自転車通勤していたAさんは、かなりのスピードを出す。それが事故につながった。そこで、付き添ってスピードを出し過ぎないように実地指導をするが、いざ1人になると結局は元のスピードに戻った。

「1人でも自律的にスピードを守って走行するにはどうすればよいか？」とあれこれ悩んでいる時、自転車のスピードメーターの存在を知った。早速取り付けて、「(スピードは)19km/hまではO。20km/h以上は×」とルールを決め、後で実際の走行データもチェックした。それからは、実に見事にスピードを守って通勤している。

16 どう判断していいかわからない

高機能自閉症のBさんは、一般企業で10年以上働いている。何年か前からメールのやり取りを始めたが、メール文面からBさんの大変な悩みや迷いが伝ってくる。それに対して、一つずつ「こう考えればいいよ」とか「こうすると大丈夫だよ」と回答を送っている。以下、固有名詞以外は原文のままの、メールである。

「例えば、朝、通勤の時、駅前のコンビニでAさん(社内の女性)が飲み物を買いにいく。その時、駅前の喫茶店の所で、Aさんが来るのを待っていると、通勤の人からストーカーと思われへんですか？」

「Cさんとお喋りしたい。なんちゅうて、喋ったらいいですか？例えば？」

「仕事の時、今日、班長の前で『あーしんど』と言ったんよ。班長に『次、しんどい言ったら死刑だぞー』と言われたんよ。冗談ですか？気にせんでいいですか？」

30 おじいちゃんの死—内面を引き出す、受け止める

8月末の帰省後から、苦しそうに顔を歪めながら奇声をあげ、手を叩き部屋から走り出すこと事が続いた。Gさんに言葉は無いが、思いをカードで選び出すことができる。そして「お爺さん」に絞り込めた。

お母さんに聞くと、8月にGさんを可愛がってくれていたお爺さんが亡くなり、それを帰省時に知らされたらしい。どうもそのことらしい。ある程度は時間が解決してくれると思ったが、1か月経っても抜け出せない。

ここに至って、Gさんの辛い思いを徹底的に吐き出してもらった覚悟を決めた。30種類ほどのカードを作った。聞いてみると、「お母

さん」「お父さん」「お爺さん」のカードを何度も手渡してくる。お爺さんの思い出も聞くと、「おじいさん」「お風呂」「テレビ」「寝る」のカードを渡してくる。それぞれについて、「おじいさんとお風呂入ったの？」「テレビ見たの？」と聞くと、その度にガッツポーズで返してくれた。「楽しかったんだね。いい思い出を残してもらえたね。」と、Gさんの思いを汲み取った言葉を返していく。

そんなカードを使った会話を、30分ほど繰り返した。その後で、心を込めて、ゆっくり、お爺さんはもう亡くなって、家に帰ってもいないことを伝えた。何度も繰り返し、伝えた。そして、最後に一緒に目を瞑って手を合わせて静かに祈りをした。

翌日からイライラした様子はなくなった。

41 感覚過敏にしたのだ

こだわりが多くて強くて、身動きがとれなくなったAさん。必然的に家族を巻き込む。暴れ攻撃して挙句の果てに父親と妹を家から追い出して、母親との二人住まい。専門家のアドバイスを受けた通所施設は一人部屋を用意し、結果通えなくなって布団にこもる。

熱い汁物は食べられない、湯船に入れない。チクチクする散髪屋に行けない。人のクシャミや咳に夜間でも反応する。周囲の会話から「ね」の入った言葉を聞くと「ねねね……」とわめき立て、トンネルの「ネ」の字を見てトンネル前でパニックを起こす。周りの家に明かりがとまり始めると布団を敷かなければならない。便が出ないとパニックになるので親がチョコボールを置いてパニックを回避する。視・聴・触覚が過敏で、「食・眠・排泄／日中活動」のありとあらゆる場面で強いこだわりやパニックが出る。

あかりの初日に入浴はクリアするが、しばらく食事で自分や周囲の利用者のお茶や汁物をひっくり返し、ご飯などを吐き出した。非常ベルにも反応し何度か押した。ストレスからか両腕も上がらなくなった。

それも、「しなくてもすむ」関係と環境を丁寧に積み上げていって、1ヶ月ほどで熱目の汁物も食べられるようになる。「ね」にも反応しなくなる。念のため預かっていた射撃用のヘッドホーン2つも使わずじまいで、預かっていたことすら忘れていた。上がらなくなっていた両腕も上がり始めて、家にも帰れるようになる。強く拒否していた父親と一緒に居られるようにもなって、暗く陰しい表情に笑顔が見られ始めた。

どんだん膨らんでガンジガラメにさせた彼の「感覚過敏」とは何か？「感覚過敏」を氣遣って「感覚過敏」を強化し、「感覚過敏」に配慮して孤独に追いやる、そんな姿を思った。何らかのベースは想定しなければならないにしても、この事例は、「感覚過敏」なのではなく「感覚過敏にした」のである。

43 反応しやすいものを視界から遠ざける

毎年の親子一泊旅行の宴会で、執拗で強引なトイレ要求やお茶要求が激しく、最後まで食事場面に居ることが難しいAさん。視界に入るものに反応しやすいようで、この旅行では、テーブルの中央の水を、Aさんが手を伸ばしても届かない距離や見えにくい場所に置くことで、執拗さが激減した。目に入るか入らないかというだけで、行動が大きく変わる様子を直に感じ取れた。

62 登園拒否は自信がつけば無くなった

A君の通所拒否は長年続いていた。たまに通所しても玄関をスムーズにくぐれない。そういった相談を受け施設訪問をして応援することになった。

分かったことは、作業中の頻回なトイレ通いとお茶のみによる悪循環、途切れがちな作業がトイレ通いを誘発することであった。そういった把握の下、ある日、次のことを集約的に取り組むことにした。

- (1) うまく援助してあげられなかったことを本人に謝り、「これからA君がうまくいけるよう、きちんと応援するからね」と、これから援助する職員の姿勢を伝える
- (2) 大集団の中で宙ぶらりんの状態ではなく小集団 (3名) の作業室に場所を変更してもらう
- (3) 指示待ちではなく自立的に動けるための作業手順の構造化を図る。(手がかりづくり)
- (4) 「お茶は休憩の時飲みます」等、約束事を文字に書いて掲示。それを場面毎に確認する。

そういった取り組みの結果、うまくいく場面が増えてきた。そして通所拒否はなくなって、玄関もスムーズにくぐれるようになった。

100 ああこれだ！怒っている理由は

ショート利用のBさんが食事中突然怒り出した。原因はわからない。あれこれ思い巡らせて対応するが上手くいかない。ふと周りを見た時、斜め前の人の頬にご飯粒がついていた。「ああこれだ」とわかり、ご飯粒を取り除きながら「Aさん、この人の頬にご飯粒が付いていることで怒ったのね」と話しかけると、すーと怒りが収まった。

<S・V> 上手くしゃべれない彼らが何かをした時、その意味は一体何なのか、それへの「感度」は重要。

「感度」はプロとしての力量の必要条件。「何やってんだ、困るよ！」じゃダメ。その感度が低い職員は今から辞めて欲しい。あるいは色んな仮説を持って、何日か経つうちに「あっ、あれは、そーだったんだ。きつと！」という風な考え方、感じ方ができる人ではないと出来ないんです、この仕事は。常に、この感覚は磨いておいて欲しい。

127 作業が開始されて、イライラが消えた

今年度は、正月明けの帰園後の1週間、職員が揃わず作業が出来なかった。予想通り、状態を悪くする利用者が始め、こだわり、奇声、イライラが増えた。そして、1週間後やっと作業が始まった。そして、いつものあかりの家に戻った。＜安定的な日中活動としての作業＞の大切さである。

136 怠けるな！

ケーブル解体作業に従事しているKさん。未解体の銅線を「みんな用」に中央に「山積み」していたが、突っ立ったままの状態が目立った。職員の声がけも、つい「頑張れ」といった「怠け者」への声がけとなる。

観察を進めていく過程で、職員が10本程度を選んでKさんの作業台に置いてみた。するとKさんは「怠け者」どころか誰よりも能率良く、集中して全部を一気に仕上げてみせた。現在は、作業班のエース的存在である。

実は、「怠け者」ではなく「分りにくさ」であった。そのキーワードは、①「山積み」ではなく「小分け」であり、②中央に山積みした「みんな用」の銅線ではなく「自分用」の作業台に置かれた銅線であった。

ちょっとした部分に「分りにくさ」があって、そこを応援してあげると、「怠け者」から「エース」に生まれ変わるのである。問題はDさんではなく、支援員側にあったのである。

<S・V> (ある事例に対して) 本人が混乱しているわけだが、職員が混乱させていると考えて付き合った方が、先が見えてくるように思う。

144 父親を軸にする

外来療育のW君は、母親を見た瞬間に髪の毛を掴みに行ったりする。母親は怯え、できるだけ顔を合わさないようにするしかなかった。父親に対する攻撃もあるが、ある程度抑制が効く。そこで父親を軸にして、母親との関係改善を図ることを考えた。

まず、あかりの家で作業課題を利用して、父親とW君との関係を強化していった。次に、母親を見ても掴みかからないために、父親と私が付き添う形で、母親とW君を近づける段階に進んだ。母親が声かけなどして関係的な距離を縮め、空間的な距離も少しずつ詰めていった。最初は距離が縮まると髪の毛に手が伸びていたが、手を添えてW君の手が伸びないような応援をしていった。そのよう

にして、段々手が伸びることが減少していき、母親も不安を抱えながらも少しずつ自信がついていった。

次は、家庭(私不在)における関係作りであるが、これまでの取り組みによって父親の存在で母親を見ても掴みかかることが次第に減っていた。そして仕上げは、W君と母親の二人だけの場面になる。失敗をしないように、W君の状態が良い時を選び「掴まなくて済んだ」という経験を積み重ねていくことの大切さを話した。そういった経験を積み重ねていくことで、母親も自信がつき、またW君も安心できることで、今は何とか一緒に過ごせるようになった。

<S・V> 日本の社会は母系社会で父性原理が弱い。だから家庭内暴力が出やすい。思春期に母子関係が上手くいかなくなった時に、お父さんが登場してきて、世の中の原理原則のようなものをポンと抱えて入ってくると、母子関係が父子関係に変わって、家庭生活が上手くいったりする。

148 親との信頼関係

Eさんのこだわりは相当に激しく苦しい。集中的な取り組みで、あかりの家でのこだわりが改善し、表情も和らぎ始めた頃、帰省時の家庭で全く別の大きな問題が出始めた。そして、今までに増して家族を困らせ不安が募った。しかし、職員が家に応援に行き、親を困らせた問題が改善するにつれ、当時、あかりの家での取り組みに抱いた「疑念」(と書かれている)が、次第に消え、前向きな気持ちに変化していった。

<S・V> どんな方法をとる場合でも、我々プロは、親と意見が同じところから利用者との付き合いを始めなければならない。いくらいい方法だと思っても、親が反対だと絶対上手くいかない。薬でも、親がダメだと思ったら、どんな薬を飲ませても悪いことしか起こらない。お母さんの状態が悪くなると、連動して彼らの状態も悪くなる訳だから。

避けなければならないことは、帰省後の状態の崩れを親のせいにしてしまうことだ。我々が崩れを親のせいにし、親があかりの生活を不憫に思い、我々と親とがバラバラだと間に挟まった自閉症の人の状態は必ず悪くなり、その状態を三者が諦めて努力しなくなってしまうからだ。

親は我々以上に苦労している。それを超える苦労をし、結果を出さない限り、親たちはプロを信用しない。小さい時からプロは役に立たず、混乱させられるようなことばかり言われ、親の努力の結果が施設入所な訳です。逆にそれを突破して親に信頼してもらえば、連携することが可能はずだ。むしろ「難しい」。尋常な苦労では、今のままだ。これまでの人のしなかった程の苦労をして、突破せねばならないのだから。

161 新任職員によって調子を崩す

Aさんは、職員の異動、とりわけ新任職員で調子を崩し易い。泣く、唾を飛ばす、向かっていく、尿失禁する。興奮しやすくなり、眠りづらくすることが目立つ。

きっちり彼女を守りきれない故の行動の乱れであり、職員側の問題である。いずれにしても、新任職員の成長をどう応援できるかがである。

163 プロになるための修行

新任職員が、D君の食事場面で何年か振りのパニックを起こさせた。若い職員は、自分の言葉がけから引き起こされたパニックに落ち込んだ。

そういった時、パニックや関係を定着させないために、次から関わりを避けるやり方がある。しかし、福祉生活現場にそんな余裕はない。同一職員が違った形で関わるが必要になる。場所や場面を変えて関わる。言葉かけでつまづいたのであるなら、次は、「一寸聞いて」と間を置いて本論に入るとか、低い声で、ゆっくり、伝わりやすい言葉で話すなどの配慮が必要となる。そういったことを話した。修行である。

<S・V> 本を読んで勉強しても付き合い方の力量はあがらない。結局失敗しながら痛い思いをしながら、彼らと付き合いながら、いろいろなことを気付かされながら、自分の力量を上げていくしかない。

講 演

『自閉症の理解と行動障害への支援』

大正大学人間学部教授 児童精神科医
小林 隆児 氏

自閉症の理解と行動障害への支援

小林 隆児 (大正大学人間学部臨床心理学科、くじらホスピタル、児童精神科医)

はじめに

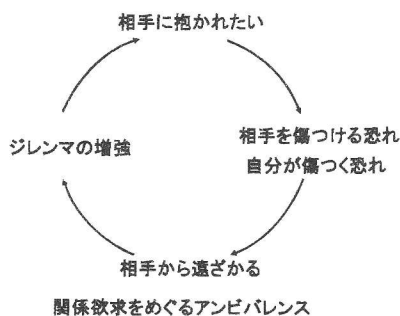
なぜ行動ばかりに目を向けるか
国際診断基準による診断の流れ

1. 「行動」と「ことば」について考える

- 1) 「行動」だけを見ているか
- 2) 「話しことば」を聞く時、意味だけを受け止めているか

2. 自閉症の行動特徴をこころの動きに焦点を当てて考える

- 1) 対人関係障害・・・自閉的行動様式
甘えたくても甘えられない・・・アンビバレンス



具体的にどのような行動として表現されるか

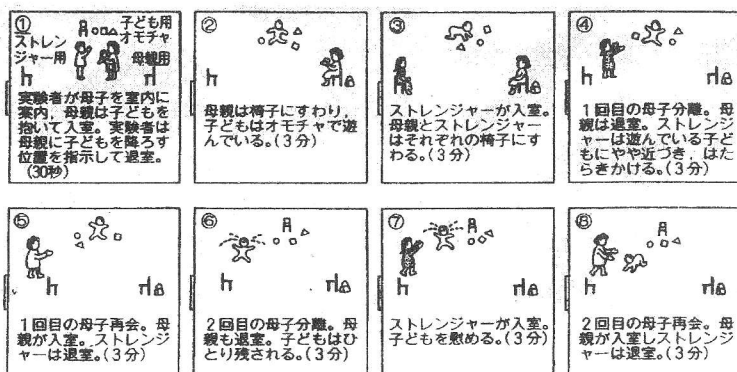


図10-1 ストレンジ・シチュエーションの8場面

2) コミュニケーション障碍

子どもの発することばを子どもの土俵で考えてみる

3) 強迫的こだわり、限局化した興味

アンビバレンスによってもたらされる安心感のなさ、恒常的な警戒心

3. <子ども－養育者>関係の見立てで大切なこと

1) 関係の中で動いているものを感じ取ること

自分の身体を通して感じ取るしかない体験

原初の知覚体験：身体を通して感じ、その際必ず気持ちに変化が起こる（快/不快など）

2) <子ども－養育者>関係と関係欲求（甘え）

関係の中で子どもの関係欲求がどのように表出されているか（されていないか）

3) 関係欲求をめぐるアンビバレンスと関係の悪循環

子どものアンビバレンスがどのようにして関係の悪循環を生んでいるかを把握する

4) 実際の関係の中で生じている関わり合いを把握する

実際の遊びを関与しながら観察すること

「今、ここで」何が起きているかを生々しく感じ取りながら、それを取り上げて一緒に考えていくことの大切さ

何気ない言動の背後に働いているものに着目する

4. 関係の成立を困難にしている基盤は何か

- ・ 関係欲求をめぐるアンビバレンス
- ・ <知覚－情動>過敏とアンビバレンスによる悪循環（図3）
- ・ 関係の悪循環（関係障碍）（図4）

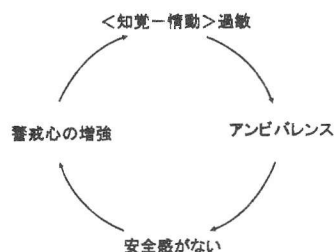


図3<知覚－情動>過敏とアンビバレンスによる悪循環

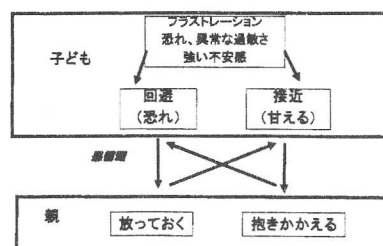


図4: 親子関係に生じる悪循環（関係障碍）

5. 発達障害にみられる多様な行動障害はなぜ生まれるか

- ・アンビバレンスと関係障害によってもたらされる葛藤行動（図5）

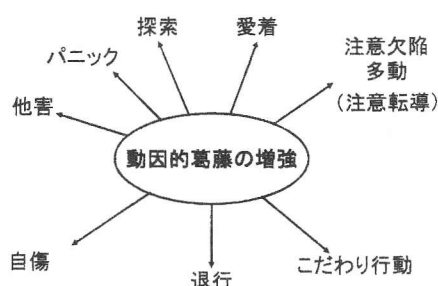


図5: 動因的葛藤行動

6. 行動障害はなぜひどくなっていくのか



図6: 行動（障害）によってもたらされる関係の悪循環

7. 発達障害に対する関係発達支援

関係障害がもたらされる最大の要因・・・子どもの関係欲求をめぐるアンビバレンスと、それと結びついて現れる養育者の側の子どもに関わるのが難しいという感じ

臨床の要・・・このアンビバレンスを緩和するように働きかけることと、養育者の側の負の感情および負の関わりの低減、それによって両者のあいだに生まれた悪循環を断ち切ること

アンビバレンスを緩和する働きかけの中心は、それまでの過干渉的なあるいは一方的な対応をできるだけ控え、子どもの関心の向かうところを丁寧に受け止めること

この対応が功を奏すると、子どもの関係欲求が前面に現れやすくなり、その結果、子どもの気持ちの動きを掴みやすくなる。子どもの気持ちが養育者に掴みやすくなることによって、養育者も子どもの気持ちを受け止めることが比較的容易になり、当初の関わりが難しいという感じが薄れ、好循環が生まれ始める。その中で子どもに少しずつ安心感が育まれていくようになると、子どもは外界に対して好奇心を持ち始め、積極的に外界との関係を持ち始めるようになる。

子どものそうした肯定的な姿は養育者の喜びとなり、養育者の前向きな育児姿勢を強めて、子どもとのあいだで何かを共有しよう、子どもの気持ちに添おうという姿が増えてくる。こうして好循環が本格的に巡り始めるが、その中で、関係欲求の高まりとの関連で、子どもの側にさまざまな表現意欲が湧いてくる。このような好ましい関係が生まれることによって初めて、子どもの本来の発達の道が切り開かれていく。

8. 「行動障害」にどのように関わるか

斉藤（原田）理歩（2005）. 日々積み重ねていくもの（小林・鯨岡編著 自閉症の関係発達臨床）より引用

G男 青年期 最重度精神遅滞

施設に入所中の自閉症男性であるが、入所当初はこだわり、自傷、他害などの激しい行動障害を呈していた。入所後のG男に対する療育は困難を極め、職員である斉藤は満身創痍といえるほどにG男の行動障害による怪我が絶えなかったが、G男とのコミュニケーションも暗中模索の状態にあった。しかし、いろいろとG男の生活の様子を観察する中で少しずつ彼女はG男の言動の意味を感じとれるようになっていった。以下のエピソードはその頃のものである。

個別の散歩を始めてから、特に女性職員に対して徐々に自分から接して行くことが増えてきました。最初は腕を触るくらいだったのが、髪の毛を引っ張ったりつばをかけたり、頬を触ったり、こちらが嫌がるそぶりをみせると、ますます喜んで追いかけてくるようになりました。散歩中も、私が離れて歩いたり、歩きながら考え事などをしていると突然大声を出しました。それは自分の方へ関心を向けてほしい、そんな彼なりの表現でした。遊んで欲しくてたまらない、そんなふうにも見えました。ただ、そんな時にわざわざ人の嫌がることをして表現してくるため、彼の意図をよりわかりにくく、伝わりにくくしてしまうのだと感じました。

彼から出てくる言葉にも変化が見られるようになりました。女性職員の頬を触るとき、人によって触りながら出す言葉が違うのです。私の時には「ポコポコ」、別の職員の時には「ケンケン」というように、です。また、人を名前前で呼ぶのではなく、彼のイメージするものに当てはめて呼んだりもしました。例えば、ツル、クレーン車、シロクマなどのようにです。また、職員のことを表現するときに、その職員の名前を知っているのに、過去に彼に関わったことのある先生の名を使って表現するのです。例えば、ある職員に怒られると、「〇〇せんせいにおこられた～」と、養護学校時代に関わった、彼にとってはあまりよいイメージでない先生の名前を出して騒ぐのです。このような彼独特の表現に気付いてから、彼の言葉の世界が少しずつ見えてきました。また彼と話をするとき、できるだけ言葉を多く用いずに、彼の口調やイントネーションをまねて伝えと、私達が普段使う言葉をそのままの口調で伝えるよりもずっと伝わりやすいことにも気付きました。彼の用いる言葉が何を指し示し、過去のどの様な場面や気持ちの時に使われたのかを、母親から聞いたり養護学校時代の先生からエピソードを聞いたりして断片的にでも理解できるようになってきました。彼の言葉は、今現在の彼の気持ちが、過去に体験したある場面での気持ちと似たような気持ちになったときに、その過去の場면을象徴的に表現していることがわかってきたのです。

例えばこんなエピソードがあります。G男さんが大声で「もぶ（もう）ごまおさつしまっといえ～！」「クレーン車、のってけ、もお～っ！！」と、とても怖い顔をして何度も繰り返して叫んでいました。この「ごまおさつ」という表現は、とても機嫌の悪いときにだけ使われます。実はこの「ごまおさつ」は冷凍食品の名前なのですが、彼が養護学校の高等部の時、ずっと登校拒否をしており、その頃の担任の先生が毎日彼を迎えにきていました。その際、彼は必ずこの「ごまおさつ」をひとつトースターで温めて食べてからしゅしゅ出かけて行っていたのです。その時の気持ちと似たような感情が沸いてきたときに、どうやらこの「ごまおさつ」という表現を使うようなのです。ですからこの言葉が出た時点で何かがあったことはすぐにわかりました。その後の「クレーン車」で、これが誰を指し示しているのかがわかったため、そ

の職員に事情を聞いてみると、どうやらG男さんはなにか注意をうけたようです。そこで、「そんなことしちゃだめだね。」と話すのではなく、「そっかー、ごまおさつだねー。嫌だったねー。クレーン車におこられちゃったね。でももうしないね」というように伝えと、じっと聞いている、「しないね」と答えるのです。こちらが「(クレーン車と呼ばれている)～さんに謝りにいくね」と言うと、「いくね」と答えてその職員のいる方へ歩き出しました。よくわかってのだなあと、改めて感じました。何もかもこちらの言葉で話すよりも、彼の表現も借りながら、そしてこちらの言葉で返しながら話をする、そんなコミュニケーション方法に、なんとなく手応えを感じられるようになってきたのでした。

またG男さんは、私達にはわからない意味不明な言葉に対して「それ何?」と聞き返すとても嫌な顔をしました。そしてわからない私達のほうがおかしい、とでもいうような顔をするのです。本人はもう十分伝えているつもりなのです。ですから彼の発する言葉の意味そのものよりも、「いやなんだよ」とか、「うれしいよ」など、ことばにのせられて届く、彼の気持ちを受けとめるようところがけました。例えば「そっか、ごまおさつだね」という言葉は、私の中では、ごまおさつという物を理解しているというよりもむしろ、「いやなんだというS君の気持ち、よくわかったよ」という返事のようなものでした。「け～ちゃん」ということばは、私にとっては特に嬉しいことばではないのですが、彼が嬉しそうに「け～ちゃん」と言ってきた時に、同じように「け～ちゃん」と言い返してあげるととても嬉しそうな顔をするのです。そしてそんな彼と言葉をかけあっているときには、私もとても嬉しい気持ちになります。言葉というものがこの時点ではまだ、私達が普段あたりまえのように話をするときに用いる言葉とは違う意味合いを持っていたように思います。言葉そのものの意味よりもむしろ、言葉に乗せられて届くお互いの気持ちのやりとり、という意味合いが強く、こんな彼独特の言葉(表現)を用いながら、時間をかけて繰り返し積み重ねていました。

おわりに

* 参考のために

< 著書 >

小林隆児 (2001). 自閉症と行動障害. 岩崎学術出版社.

小林隆児・鯨岡 峻 (編著) (2005). 自閉症の関係発達臨床. 日本評論社.

小林隆児 (2008). よくわかる自閉症ー「関係発達」からのアプローチ. 法研.

小林隆児・原田理歩 (2008). 自閉症とこころの臨床ー「行動」の障碍から「行動」による表現へ. 岩崎学術出版社.

< 近刊 >

小林隆児 (印刷中). 自閉症のこころをみつめるー関係発達臨床からみた親子のそだちー.